～すてきな人・モノ・アートの冊子～

ふじみ野 ART88

アート発見発信プロジェクト



「転位 '10- 光 - Ⅱ」

銅版画家／中林忠良

Vol.11
2026.1.11

～時間と自然を操る錬金術師（アルケミスト）～



銅版画家

中林 忠良（なかばやし ただよし）



時間と自然との関係性の中で、複雑な条件をかいくぐって出てきたもの…、それを自身の意図にかなうように近づけていく…。作品を生み出すその孤高な作業が行われる錬金術師のアトリエは、ふじみ野市のとある住宅の地下にありました。日本を代表する版画家のひとりであり、国内外で多くの賞を受賞されている銅版画家、中林忠良さん。洗練された優しい雰囲気の中にある、瞳の奥の鋭い光が印象的なジェントルマンです。

銅版画の技法は、針などで彫り込む直刻法と薬品で腐蝕する腐食法の２種類に大きく分けることができます。中林さんの作品は主に腐食法で制作されており、酸性薬品に銅版を浸すことで腐蝕させ溝を作り、そこへインクを詰めて紙を乗せ、プレス機で圧力をかけて凹部に詰めたインクを紙に転写させるものです。

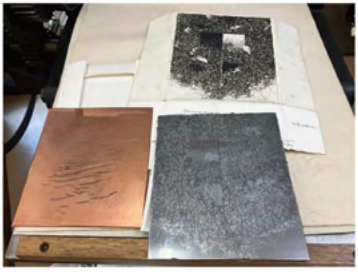
インクが織りなす白と黒の世界。その原風景は、中林さんが幼いころに見た疎開先の新潟での雪景色の白い世界や、窓ガラスに水蒸気が結晶化する氷華の印象であるとのこと。

作品制作を重ねていく中で、金子光晴の詩「大腐爛頌（だいふらんしょう）」の“すべて腐らないものはない”という一節は、中林さんの想いに沿うものでした。腐る過程にある人間が、腐る過程にある自然をあやつるということ。自身で腐蝕液と対話しながらどれだけの時間腐蝕させるか、季節や温度などの自然との関わり方、その狭間で表現をしていくこと。それは時間や自然を掌握するようでもあり、とてもおもしろく感じられたそうです。

錬金術とは、金属だけでなく様々な物質や人間の肉体や魂についても、それらをより完全な存在に変容させる試みのことです。そして、錬金術師とはその術（すべ）を己の人生をかけて探求する者。

探求者が表現した銅版画は、鑑賞者をも変容させ、それはまるでこの世界をより美しく完全なものにしていくための、美しい企みのようなものであるのかもしれません。







中林 忠良

銅版画家、元日本美術家連盟理事長
2003年紫綬褒章受章
2014年瑞宝中綬章受章
2023年文化功労者

右上写真「転位'15-光-I」

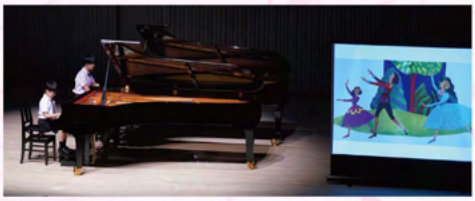
文／尾澤 景子

ピアノが大好き！



ピアニスト　杉渕 裕子（すぎぶち ゆうこ）









「ピアノが好き」「クラシックが好き」とうれしそうに話すのは、ピアニストの杉渕裕子さん。幼少期はセミが最後の脱皮（羽化）をして羽が乾いて飛び立っていくまでをひとりでずっと見ていることが好きなおとなしい性格でした。小学1年生のときにピアノを習い始め、ピアニストになることを決意。小学４年生で出場したピアノコンクールで敗退したとき、母親から「来年優勝したらグランドピアノを買ってあげる」と言われました。

翌年には地元新聞社主催のコンクールで見事1位を獲得。実際に買ってもらえたのは木でつくられたドイツ製のメトロノームでした。そのメトロームは、今でも杉渕さんのレッスン室に大切に置かれていて、ときおりいい音を奏でます。

鹿児島県の漁師町・阿久根市で育った杉渕さんは、汽車で片道数時間かけて鹿児島市までピアノを習いに通う日常でした。その努力が実を結び、全寮制の武蔵野音楽大学附属高等学校に見事入学。個性的で自分の意見を言う同級生たちに出会い、変わったことをしないようにがんばっていた杉渕さんは、「それでいいんだ」と気持ちが自由に楽になったそうです。音大生時代には、帰郷する資金を捻出したくてピアノ講師のアルバイトを始めました。現在もピアノ教室を主宰している杉渕さんは、「ピアノを好きでいてくれればそれでいい。自分の生活の中で、ピアノとの付き合い方をその子なりにわかってくれれば」と話します。都市部と異なり学ぶ機会に恵まれなかった自身の生い立ちから、地域で活動したいという気持ちは人一倍強かったとのこと。

今後は「自分らしさ」を突き詰めたいそうです。「ピアノを弾く」「ピアノを教える」という2つを護りつつ、今こそ探求していきたいと真剣な眼差しで語る杉渕さんに芸術家魂を感じました。曲目としては小品（ピアノのために作られた、小規模な音楽作品）に惹かれていて、曲名から想像力をえて表現するのが楽しいそうですよ。



ドイツ製のメトロノーム

杉渕 裕子（主宰教室：pianissimo art）
電話　049-264-9686
メール　capriccioso72@yahoo.co.jp
HP

文／臼村 さおり

フラワーショップ花のん



人との繋がりを大切に

そこは自然と人が集うお店です。「フラワーショップ花のん」の店内に足を踏み入れると、明るい笑顔の女性スタッフがいつでも快く迎え入れてくれます。気さくな接客で、その人にぴったりの素敵な花束やアレンジを作成してくれるこのお店は、花を買いに来た人だけでなく、犬を連れた人や近所の子どもたちが交流する憩いの場です。訪れる人とのコミュニケーションをとても大切にしているというスタッフの皆さん。小学校のまち探検の立ち寄り店舗になっていたり、フラワーアレンジやハーバリューム作りを楽しむレッスンも開催しています。

そんな花のんの誕生の経緯は、いつも人との繋がりを大切にしてきたという店長の菅原敬一さんならではのストーリーです。2011年、大手情報通信機器メーカーの保守会社で経営推進本部長だった菅原さんは早期退職し、次の人生を模索していました。そんな時、ふとしたご縁に導かれ、公園で犬友として出会ったフラワーデザイナーの有薗直美さんと組んでの花屋経営を思い付きます。菅原さんの第二の人生の始まりです。

賛同した妻の公美子さんも勤め先を退職し、フラワーデザインを学び、資格を取得しながら技術を磨いていきました。有薗さんからのご縁で繋がった、ハイレベルな国家資格を持つ女性スタッフ（柳沢さん、渡邊さん）との出会いにも恵まれ、技術力に自信のあるお店となりました。

今でこそ経営は順調ですが、当初は赤字続き。ホームページを見直したり、通販事業を始めたりと、持ち前のスキルを活かした経営戦略で対策を立てたところ、コロナ禍の通販需要とも相まって売り上げは急上昇。「私、IT関係は強いんです」と、笑顔で話してくれる菅原さん。ブログやインスタグラムも取り入れ、ホームページを強化し、2022年にはアプリも導入しました。インスタの投稿は若い人の感覚が大事だろうと、娘さんに任せているそうです。

70歳にして、人と話すことが好きで毎日仕事が楽しいとお元気な菅原さん。人と繋がり、関わりながら、あと10年は働いて、娘さんにお店を引き継ぎたいとのこと。人とのご縁から始まった花屋。人々の憩いの場である花屋。人との関わりが人生の活力になることを教えてくれる素敵な店長さんのお店です。



左から菅原公美子さん、柳沢さん、渡邊さん、菅原敬一さん



店内商品は全てスタッフの手作りです。

フラワーショップ花のん
ふじみ野市うれし野2-3-1 城者ビル1階
営業日時 10:00～18:00（木曜日定休）
電話 049-293-8138

HP

Instagram

文／山田 由季



自分の身の回りにある見たことのない小さな宇宙を。

実験写真家　上原（うえはら） ゼンジ

"実験写真家"というユニークな肩書きで、写真の新しい魅力を多方面に発信し続ける上原さん。ひと目で面白いと思える素敵な写真たちはどのように生み出されてきたのか、そのルーツと展望に迫ります。

上原さんの写真への興味は、学生時代に経験した美術家の赤瀬川原平氏が提唱する「超芸術トマソン」※1を探すことがきっかけでした。※トマソンとは、*誰かが意図して作ったものではないのに、建物や街の中にひょっこり存在する無用の長物のことで、古い建物の階段だけが不自然に壁に取り残されていたりするもののことです。そこから派生して、現在は猫が意図せずに生み出した芸術なども記録をしています。*

それまで出版業界を志す一学生であった上原さんは、街中の何気ない景色や佇まいが写真というフィルターを通すことでより意義のあるアート表現に昇華されることを知り、そこから写真家の森山大道氏に師事し、写真の世界へと大きく足を踏み込んでいきます。

その後、独立して写真界でさまざまな表現をする上原さんは、森山氏から常に課題とされた「見たことのない写真」を撮るためにデジタル・アナログ問わず実験的かつ先進的な手法を模索し、取り組んできました。意図的にブレた写真を撮影する手ブレ増幅装置、透明球をフィルターに取り付けて撮影する宙玉レンズ※2の考案。時にはチープな工作の方法を公開するなど、知恵と工夫を凝らした技法で撮られる斬新な写真の数々は、まさに実験写真家である上原さんだからこその作品群です。

最近では未来を担う子どもたちに写真の面白さを伝える活動にも力を入れており、自身の表現である万華鏡写真※3の講座やワークショップを定期的に開催し、子どもたちに写真の表現の幅広さを教えながらも、子どもらしい創造力にいつも刺激を受けているとのこと。

写真はかくあるべしという
固定観念ではなく
自由な発想で楽しむことが大切

それはルーツであるトマソンでも同じであり、トマソンで得た自由なものの見方を海外へも紹介していきたいと語る上原さん。これからも新たな表現への模索やチャレンジを続ける上原さんの印象的な活動は、今後も多くの人々に影響を与え続けることでしょう。

※1:階段だけのトマソン物件



※2:手作りした宙玉レンズ



※2:宙玉レンズで撮影したコスモス



※3:万華鏡で撮影した人参



上原ゼンジ写真実験室
WEB サイト：https://zenji.info/

Facebook　Instagram

文／水野 健登





人形劇・読み聞かせ・パネルシアター やってみたいことが実現できるサークル

ゆかいななかまたち あったかおひさま

「あ」なたがいてくれて嬉しい。今を一緒に楽しもう」そんな声が聞こえるようでした。福岡中央公園のイベント、小学校の児童クラブで公演を観たときです。観ている側なのに、公演に参加しているような不思議な一体感が心地よく、幸せな時間でした。やさしい空気が子どもを安心させるのだろうなと、笑顔が広がっていく様子を見て思いました。子どもが活き活きすると大人の表情がおだやかになるんだなと、あったかいおひさまが雲から見えてくるような時の流れを愛おしく感じました。



活動開始は2018年、メンバーのご実家がある寄居町でのイベントへの出演依頼がきっかけです。幼稚園、小学校で読み聞かせをしていた仲間が集まりました。子どもをそのまま認め否定しないで受け止める、みんなを照らすおひさまのような、おおらかな人たちです。ゆかいで楽しいことが大好きで、やりたいことがたくさん。活動開始から間もなく、「オリジナルソングがあったらいいよね」となれば、自分たちで作詞、イベントで出会った方に作曲してもらったり、「コロナ禍で公演依頼は受けられないけれど、気持ちは届けたいよね」と思えば、ビデオレターを送ったり。続けられていることがありがたい、家族の協力があってこそと感謝の気持ちをもって、ドキドキワクワクすること、素朴であること、楽しむことを大切に真摯に取り組む。だからこそ、また来てほしい、異動先にも来てほしいと公演数は増え、2024年は22公演。

メンバーは19人（2025年7月）で、やれる人がやる、「楽しかったね、みんな最高だよ」で公演を終えることが基本。ハプニングはチャンス。大人でも失敗するよ、こんな大人もいるよ、そのままでいいんだよと伝える機会にする。力強さ、あたたかさを感じ、涙が出そうになりました。何より印象的だったのは、メンバーに会えるのが楽しいということを原動力とし、みんなが輝いてキラキラできることが嬉しいとお互いを尊重し、ここに居場所があると信頼し合っていること。子どものメンバーからは「これからもやりたいな」というお手紙が届きました。





今後は人間劇にも挑戦したい。「河童はどう？」「昭和物を伝えたい」と話は尽きず、今からワクワクします。

ゆかいななかまたち　あったかおひさま

Facebook

文／寺内 みか

「言葉は命」



詩人　杉本（すぎもと） 真維子（まいこ）

詩集『皆神山』で萩原朔太郎賞を受賞した、ふじみ野市在住の詩人・杉本真維子さん。
杉本さんにとって、詩は人生そのもの。
6歳のとき、「人は死ぬ」という現実に初めて向き合い、戦地帰りの祖父の言葉を広告の裏に書き留めるようになりました。
「言葉を書き留めれば、祖父は死なないかもしれない」。そんな祈りにも似た行為が、詩の原点になりました。
8歳から自然と詩を書き始め、学校の作文でもその言葉は“詩のかたち”を成していたといいます。
学生時代にも詩から離れることなく、社会人になってからも「一日一篇書かないと眠ってはいけない」と自分に課していた時期も。
そんなある日、図書館で出会った、哲学者フッサールの「現象学」が転機に。
“主観から本質を取り出す”という視点が自分の表現と重なり、会社を辞めて、再び大学で哲学を学び直しました。
詩人としての一歩は『現代詩手帖』への投稿。何度も掲載され、年間最優秀新人賞に選ばれました。
その後、詩集や連載が始まり、数々の文学賞受賞へとつながります。

詩の創作のきっかけは、日常にふと訪れる「違和感」や「感動」。それは書き留めず、時間の中でろ過され、再び浮かび上がったときに一気に書き上げ、2か月かけて整えていくそうです。
「テーマは決めない。予定調和から外れた“一点”を書き尽くす。」
そう語る杉本さんの詩には、命にまつわる作品も多く見られます。
「言葉一つで意識が変わり、意識が変われば世界が変わる。
絶望も、意識の変化によって、絶望ではない世界に変わっていく。
そうなれば命はつながっていく。言葉一つで、生きるのです。
言葉は命を表現するために、とても大切なものなのです。」
――言葉は命。



杉本さんの詩にふれると、ふだん何気なく交わしている言葉の奥に、豊かで深い力が秘められていることに、はっと気づかされます。
その背景には、読む人それぞれの心に寄り添うような、解釈を押しつけない「余白」の存在があります。
ぜひ、あなた自身の感じ方で、その世界にふれてみてください。



杉本さんは、現在、大学で学生に教える傍ら、地域での詩文化の発信にも力を注いでいます。

杉本 真維子
【受賞歴】第58回 H氏賞、第45回 高見順賞、
第31回 萩原朔太郎賞など多数の文学賞を受賞。

Facebook
X

文／宮地 直樹

～ふじみ野ART88（発見・発信）私たちが目指すもの～

いつの時代も変わらず行われてきた「表現する」ということ。その手法は時の流れと共に変化し、今では多くの人がSNSなどで自分自身の感じる様（さま）を表現するようになりました。表現方法もジャンルを超え、新しい取り組みも試すことが容易になり、AIなど今までの私たちの概念では想像もつかないものが生み出されるようになってきました。しかし、どのような手法をとったとしても、私たちに共通する心の奥に触れるものは変わらないものです。古（いにしえ）の人々が手掛けた作品が、今も私たちの心に感動を生むのは、表現されたものが時間も空間も超えたところからやってくるからなのでしょう。アートが鑑賞者の心の奥に触れたとき、新しい可能性がひらかれ、今という時代を超え未来へと繋がっていく…、私たち一人ひとりの存在は、大きな時代の流れの中の一つのアートであるということを、ふじみ野市内で活躍するアーティスト達は教えてくれます。

ART88では既成のアートという概念やジャンルにとらわれることなく、人の存在によって表現され繋がりを生み心を豊かにしていくものをアートと位置づけ、ふじみ野市内のアーティストを発見し、その情報を発信してゆきたいと考えています。とらわれのない変化のある生きた関係性によって、お互いの心の中に新しいものが生まれ、発展してゆくのではないでしょうか。皆さまが見つけたふじみ野市内のアートに関する情報も共有し、私たちも一緒に新しいものを作り出していきたいと思っています。

この冊子が架け橋となって新たなものや交流を生み、ふじみ野市全体が多様性に満ちた一つの美しいアートとして存在すること…そして、その豊かな色彩や響きが、世界中に広がってゆくことを私たちは願っています。

市民編集員／臼村さおり、尾澤景子、寺内みか、
水野健登、宮地直樹、山田由季（50音順）
このプロジェクトは上記6名の市民編集員により企画・取材及び編集を行いました。

UD FONT by MORISAWA 本文に見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

ART88のバックナンバーは、こちらからご覧いただけます。

ART88をいっしょにつくりませんか

アート発見発信プロジェクトでは、市民編集員を募集しています。
この冊子は、様々な分野の有志が集まり、それぞれの感性でふじみ野市の素敵な人々やモノ、活動を綴ります。音楽や芸術分野、創作活動などでご活躍の方々との出会いやインタビューを通して、彼らの「感性」や「思い」に触れることができます。
ご興味のある方は、ぜひふじみ野市文化・スポーツ振興課へお問合せください。

発行／ふじみ野市文化・スポーツ振興課
編集／アート発見発信プロジェクト市民編集員
〒356-8501 埼玉県ふじみ野市福岡1-1-1
TEL：049-262-8124
メール： bunka@city.fujimino.saitama.jp
紙面デザイン／有限会社荻原印刷　ogichef@dream com

文化芸術事業・アウトリーチお引き受けします
ふじみ野市文化協会
会員募集中
イベント広報　活動サポート
イベント企画　人を繋げる
☎ 049-256-9708 ✉ fujimino.bunkakyokai@gmail.com
https://fujimino-bunkakyokai.com

音楽で人と人が繋がる
文化芸術都市を作りたい
コンサート演奏依頼　演奏家・講師派遣依頼　コンサート企画運営
ふじみ野市を中心に活躍する魅力的な演奏家が多数所属しています。
毎月第３木曜日にマンスリーコンサートを行なっています。
特定非営利活動法人
ふじみ野市音楽家協会
✉ info@f-ok.jp　公式ホームページhttps://f-ok.jp


一般社団法人
ふじみ野ふぁいぶるクラブ
文化・スポーツが身近にある場づくり！まちづくり！子ども達や親子向けの、定期活動やイベントを開催！お気軽にご連絡ください！
事務局
☎0120-961-184
HP：http://fujimino-ssc.com

資格取得コース有り
自律神経の問題やダイエットでお悩みの方、
お気軽にご相談下さい。
老若男女問わずどなたでも受けられます。

Patio
Patio合同会社
ふじみ野市南台2-5-19
☎090-2632-0257

QRコードは（株）デンソーウェーブの登録商標です